タピオカ・言葉・夢の話（短編集）

春光　公史

・カフェ奇譚
・ジェニファー（或いはロゴスの怪物）
・泡沫のノスタルジィ

カフェ奇譚

ある日の吉祥寺。私は、目に留まったカフェに入ろうと考えた。

別に、珈琲を飲みたかったわけではない。

別に、店頭に飾られていたイチゴパフェに惹かれたわけでもない。

別に、空腹だったのでもない（その日、私はとうのとっくに、隣の牛丼屋で昼食を済ませていたのだ）。

つまり、特に何も考えていない。

ただ、何となく店に興味が沸いたのだ。

読者諸君も、通りすがりの異性ないし同性――それが下品だと考えるなら、店先のショー・ウィンドウに飾られている衣服や靴でもいい――に興味を覚えるといったことは、人生の中に一度や二度、有るだろう。当然のことだ。それというのも、とある心理学者によれば、衣服や靴といったものは、性(sex)的なものを象徴しているものらしい。私たちはそういったものに、無意識に惹かれるようできているのだ。

それだからこそ、何故私がこのカフェを気にいったのかは、今現在の主要たる問題である。男性的なカフェも、女性的なカフェも、聞いたことがないだろう。『This is a café.』『これはカフェだ。』それ以上でもなければ、それ以下でもない。beautiful でもなければ、bad でもない。

よく言えばso so（まずまず）である。それなのに、何故。

大体私はこのカフェのある通りを、高校生の時から計四年通っている。その四年間のうちに、カフェのことに気が付かなかったと言えば大きな嘘である。もしかすると、私の心は知らず知らずのうちにカフェに支配されていたのかもしれない。そんなこと、あってたまるものか。

私の頭は、いよいよ混乱するばかりであった。何も解らずに、何もかもが終わってしまえばいいのに。

何も解らずに？

ふと、頭をかすめる電撃。そして、止まらぬ震え。嗚呼、造られた無意識。

もしかすると、私は人ならざるものになったのかも知れない。

カフェに対する好奇心が、無意識でもないのなら、それは外部から操作された意識ではないか。ああ、無名の霧、薔薇十字団。そして脳内に埋め込まれるチップ。悪夢のような想像。私はそれにそそのかされているのではないか。だとしたならば、私がわたしであるのももう残り僅かだ……。

絶望を胸に、カフェに向かう。

そして、タピオカ入りミルクティーとスコーン（チョコチップ入り）を持ち、二階に上がる。カフェ前の通り、通称ムーンロードを行き交う人々。彼等は何も知らないのだ。世界に潜む悪意を。そして、その哀れな犠牲者を。

黒糖をまぶしたキャッサバと、ミルクティーが混ざり合う。

スコーンに合わせるには、少々もったりしていたかもしれない。

そんな、ある日の午後。

ジェニファー（或いはロゴスの怪物）

エズペルーデ・ジェニファーに出会ったのは、五月の終わりだ。
「ねぇあなた、あたしのこと男に見える?女に見える?」
「そうだねぇ、明晰端麗な女の子ってところかな」
当時のあの人は、すごく、すごく綺麗だった。

あまりにも一瞬の美だった。

というのも、僕が言い終わるうちに彼女の体の構造がみるみる変わっていき、ついには身体つきの良い1.8メートル程の男になってしまったのだ。
「おまん、わしのことを明晰端麗とぬかしおったな?お生憎様、わしは容貌魁偉・勇壮活発の男じゃけんのう、残念じゃったな」
「……」
「おうおう、びっくりして言葉も出んか。わっはっは、それもそうじゃな、わしは言葉によって体つきや性格が変貌する、まぁ、言っちゃぁ特異体質なんじゃ」
「へぇ」
それ以上でも、それ以下でもない反応。
濡れ雑巾を顔にぶつけたような気まずい雰囲気。
「何じゃ、さっきはあれ程びっくり仰天しちょったのに、もう落ち着きおって……まぁええ、とにかくわしはこういうもんじゃき」
「ちょっと待って」
「今度は何じゃ」
「何でそうもあなたは、謎の体質を持ってしまったのだろう」
ジェニファーが、今度は学者風の女性へと変貌した。ここまで今後の展開が見て取れてしまうことも滅多にない。過去にも、未来にも。
「そうですね……言葉というものは、人の内面はおろか、容貌までも変えてしまうのを知っていますか?」
首を横に振る。第一、そのようなことは初めて聞いた。
「あなたは文学部なら、ソシュールやラカンをご存知ですよね?」
「知るわけないだろう」
僕は文学部だ。
だからといって人文系の知識は何でも知っているわけではない。そんなバイアスを持っている奴なんて、大嫌いだ。衒学徒なんて糞食らえ。いっそここで虎に食われろ。
「なるほど……ならば、フロイトも、バタイユも、西田幾多郎もご存知ないわけで」
「そうだね、そういうことになるね」
「そうですか……であるなら、拙著『ランガージュと民主主義』を読んでいただけたら幸いなのですが……」
陽に置いた牛乳のような気怠さが、僕を覆う。終わりの見えないダイアローグ。読めない彼女ないし彼の意図。そして何よりも、『この話はいつまで続くのだろうか』。僕は、どうしようもないほどに退屈だった。
そうだ、ここは適当に話を逸らして、ごまかせばいいのだ。妙案が僕の頭を貫く。
「……ところで、あなたは幽霊やＵＭＡを信じますか?」
自分で言ったことのまずさに、気付いたときにはもう遅かった。
彼ないし彼女は、得体の知れないモノに化していたのだ。
「@a8233kk 縷◆縷阿〆Wゑ♡ ０００ｘｂｄｆｑｍｋｖ
ｆｒｂｇ水」ｚ?。★」。。一^ おいおｇｈｇに１２３４
５６７８９」
１２３４５６７８９。
今日も一つ、JAPANESE の勉強が出来たぜよ。ｓｄｑ
がう@え.ｊｓｃどぇｄｗｋｌ！！@@@@@@@@@@
@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@
@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@
@@

《ＨＡＰＰＹ　ＥＮＤ?》

泡沫のノスタルジィ

これは、僕の夢の話。
ただ、それだけのこと。

◆　◆　◆

気付いた時には、森の中にいた。夢の世界だなと何となく自覚する間もなく、あてもなしに歩き回る。仄暗い森の中を。元来ぶらぶらするのが大好きな僕は、そのまま夢の端を掴むまでこうするつもりだった。
残念ながら、最後の最後まで、僕の望みは叶わなかったわけだが。
暫く森の中で揺蕩っていると、一匹の犬に出会った。茶色のダックスフンド。どういうわけか、ちんちんをさせた姿格好そのままに、二本足で歩いていた。
「ぼくには、探しものがあるんだ」
彼はこう言った。
「でも、いくら頑張っても見つけられないんだよ」
「へぇ」
ただ、それだけの会話。
夢というものは、不条理かつシュールレアリスティックなものである。だから何かが見つからない、達成できないといったものは、気の毒だが日常茶飯事だ。だから解決策は一つしかない。ほうっておく。
そうする筈だった。

その時の僕は違った。快くこの犬のもの探しに付き合うことにしたのだ。それは、彼がもふもふとしていて、可愛いらしかったからでも、探しものついでに、物見遊山をすることを画策していたからでもない。彼が、一つ気になることを言っていたからである。
「君なら、ぼくの探しているものの在処を知っているかもしれないね」

僕が　彼の　探しものを　知っている？

僕が　君の　何を　知っているのだ。

◆　◆　◆

僕と犬は、体が保つ限りに、様々な場所をくまなく探した。不思議なことに、それらの情景をありありと思い出せる。

良く跳ねるトランポリンがあった、熊の遊び場。

澄んだ色の、名も無き川。

寂れ、いかにも何か出てきそうな、象の墓地。

レイ・キャノンボールの曲が流れていた、文鳥のスーパー・マーケット。

美しい蛇が、林檎を守る畑。

そして、厳かな雰囲気で包まれた、ライオンの図書館。

「何か」を探している間、不思議と僕らは疲れを感じなかった。探す場所が場所なだけに、笑顔が絶えることもなかった。
しかし、結局のところ、なにも見つけられなかったのだ。
「ごめんね、やっぱり何もできなかったよ」
僕は心から犬に謝った。事実、僕はここで人助けらしいことを何もしていなかった。
しかし、彼自身は、いかにも満足し切った様子だった。
「いや、いいんだよ。ぼくはやっと探しものを見つけたのさ」
「なんだい、それは」
そう尋ねるのと同時に、周囲がちかちかと点滅し始めた。どうやら、夢から覚めようとしているらしい。
「ここでお別れのようだね」
「ああ」
「少しの間だけど、君といれてぼくは幸せだったよ」
「またどこかで会おうね」

そこで、僕の夢はぷつりと途切れた。

その時の彼の表情を、今も忘れることができない。

泣いているような、そのくせ笑っているような顔。

◇　◇　◇

目を覚ますと、僕の目から涙が流れていた。いつもより長く寝てしまった、日曜日の午前九時四十二分。ふと、机の写真に目を向ける。

――――――。

そうだよね。君は、僕といっしょに――。

理想も、願いも、全ては叶えられぬもの。
また彼と会うことも、
一緒に遊ぶことも、
夢でしかない。
泡沫に消えるノスタルジィ。
僕は消えゆくものに背を向け、
前を向く。